盛衰通紀

四十五 四十六

戰記

姫

内閣文庫
和書
三四七〇九 類
三三 冊
一五一 函
七 架
(二世方)

第七

共 廿三

内閣文庫
番號 和 34709
冊數 33 (32)
函號 151 60

国立公文書館
National Archives of Japan

盛衰通紀巻第四十五

目録

奥州の武門長沢谷我 付 薬川軍事

江戸城軍評定 付 村越為使者来陸州事

越後国一揆乱事

西国方面の責山口父子討死事

小田原井毀合戦の事

西国物語 付 上杉城物別尾別法別合戦事

石田佐別出張法城守護事

東国勢江戸川本曽川を越彼岸に陣事

彼岸城責 付 江戸軍兵粮欠乏光事

内閣文庫

奥羽佐竹地集于山形因佐竹人聲之
丹地与二若干智謀之
以上

豎裏通紀卷第四十五

奥州阿武隈川合戦付藻川軍事

家長卿七月廿七日より八丁目近江守まもりし白石乃城を攻たゝく政宗威を奮ふの姫政宗を大崎伊達と号せ　けいきほひ藻川を乱んとせしより藻川と白石との間よあふくま川と云大河あり同日巳刻より水ひさ増く思ひもよらぬ事なれ共藻人国左内栗生美濃小田切左兵衛永池右衛門左馬布施治部右馬小川弓丸保内勘助兵部小輔蒲生家のものたちまち六小京勝より佐竹福島より二里さ紀の郷の上と云ふ処よりふ川をへだてゝ陣しけり七月廿九日の夕刻川向より政宗ら竹より雀の詰立て二三手弱と見えれ小島左内川を渡て戦ん

と云ふ説りのものなり。むかし内ゥ云家し味方陣ゥを敵ハ大勢
なり川を越てを負けけ行く長ても負るゥ敗れハ川を越てん
もせをあゝハさんと奈へ〳〵也（ゆゑんなを）と者へ三百騎ゥハ色
さりゥゥ政宗川乃中途ゥ〻ゥ弓鉄炮ゥ〻ゥ越しむ政宗をつゥゥ
越く金陣方級ハして小川ゥ出布陣ゥ大勇保田勘助討死
して士卒をたゝく政宗川中ゥ〻ゥ居内と者力打し内ゥ
ゥゥる程ゥ縅の羽織を二者力まて切付る此時栗生ゥ清も
内をたゝけゥ政宗と越ハ此時京勝方此余騎と政宗ゥ
二百余騎と入こゝれゥ弥ゥ金陣方級を生福治郎の者ゥ
三四度返ゥ合せゝいくさしゥゥ奈ハ敵ハ
出れハ政宗ゥゥ人数を引上けゥゥ此時京勝ゥ臣に須田

大炊助ハ薬川ゥ出ゥゥ政宗を討んと
せゝに政宗をやゝ引ゥ板陣の小荷駄を入ゥ如（須田ゥ勢押
よせゝ政宗ゥ行ゥ崔の級付ゥ陣幕をゥひ京勝（敵ハ
白石の城の代ゥとゝ板ひゥ政宗ゥ〻ゥ川（家ゥと
和ゥ
家康公ゥ〻ゥ沢ゥ引こゥゥて合戦ゥ〻ゥ陣下智（
政宗ハ伊達郡ゥ陣をゥゥやゥ川の押ゥハ小京ゥ臣家ゥ出
ゥる大鉄炮十八挺を彼郡ゥ奈ゥゥ暗廿八日の夜中ゥ
先陣行金倚中ハ川を越ゝ薬川の城ゥ陣ゥ居ゥ
政宗ゥゥやゥ川ハ城まゝきゥ中越ゥゥ行金引ゥんとせ
ゥ須田大炊助ゥを出て越ゝゥ行金打勝ゝ対陣しゥゥ

此時片倉より濱田治部方へ中ハ無人数を引とり来一人を天こと
よするハいかなるすそと中越られハ政宗いそ和濱田行向く片倉濱
田南人まく引れ〳〵せ方南人まく引とられぬものゝハたと一
何百騎を遣とも引れるす加へくゝ氏と中られハ濱田畏く百人の内
鉄炮のもの八十人召連片倉と相議して濱田ハ川を越せて俵を
して又二百挺の鉄炮ゟく川を越してそなへを立させく俵ゟ人
数を引れ〳〵とく相器清左衛門鉄炮二百挺ハ川を越て
そなへく後陣の濱田ゟ引とらん時ゟ敵家退ハ川中まて打ひくせとの
儒ゟ鉄れとめ〳〵といくさハ返されまと相器山岸南人たゝ
片倉ゟやく〳〵ゟ出と片倉ハ俵を乱し城中ゟ出張の勢ゟ引く
くゝ敵ハ鉄炮ゟく退ゟる敵をうちたゝひゝるくゝ

引て退〳〵といふ片倉なと同心して片倉三百余騎ゟさと急
ゟ云をすめ〳〵おてかく除治部四郎ゟ勢一戦ゟ及いたゝ仮小せすいやとて
片倉人数を引上ゟ敵云あとをゝひゝるを濱田治部八十挺
の鉄炮を二十挺つ四隊ゟ立くゝ引すて川を越ゟ相器山岸も
四隊ゟ立て鉄ゟ勢を引れゟ手柄政宗ハ片倉濱田をめて
治部ゟ勇を感し中ゟ白石の城せあれゟやな川の退口ひと
治ゟる名ゟ相白石城ゟ相器ゟ鉄〳〵ハ入ゟ口情片倉
白石ゟ南ゟとやせとも俵中ハ治ゟ洋家の為なれハ思ゟ沢
国元ゟ沢ゟ安理石垣なれとも白石の城ゟハ先方ゟ集まれ
ゟとやゟ来延文のはゟ知ハ相人とも将の事ハなせ
ゟ俵ハ一人の為を義亡れハ中下知をうけく相働とゝ政宗

京〻汝一人まゐり京勝寺を来〻ハ必城より出て戦ふ可用
陣をふせきく叶ぬ時ハ自害せよ城三日持こ〻ハ八幡も照
覧あれ政宗洲をえこゝまハせ早速接続せんとゝ濱田宮て
接続のよ趣うけ京の命助人〻接続し給て
徳川殿の命ハそむうれく出馬無之候一統れハ家康の忠節
くふ忠とゝなんと中切り者三百余人を差〻濱田を白
石城ハ攻されり京勝ハ上方の軍を見合白石をハせあさりそう
江戸城まく軍評定付村越右使来接渉ゝ
七月十九日江戸城へ諸大名出仕して、伊達政宗酒井宮内大輔家康出語
して面て自由へ引ゆいくさし給ひんや
家康と一処まく江戸まて軍あ〻んやとゝふ井伊直政ゝ中ハ三州ハ

御代〻の忠臣を強ハ武勇まゝて押紙あり強を敵の馬のひ
つめ〻をんハ口惜しゝれハ業を海ハ海ハまく味方の右の左城
なりゝ川ハ山内對馬を一番横須賀ハ大須賀出羽守忠政濱松を
堀尾伝濱を忠氏吉田ハ中務大輔忠政濱松を
鳥政信渉ゝ福島正則を和三州而所の者ハ中務忠勝家を攻
まて家手あり紀れハ三州へ出張し吉田接渉ゝ家ハ
ゆ〻西を勢の見ハたあさ氏ゝ
兵ゝ敵を待ハ会ゝ濱列書地ゝ京まて一戦強く
正則先陣ゝ中
家康公ゝ百を上て戦へと一決して退出江戸八月朔日福島
ゝ先陣を命し也〻御免あ〻て〻〻馬を強ゝ

ゟ法永法京ハ法別の業内ゟとして福修ゟ〻〻彼ゟ出馬を
給りゟり池田三左衛ハ猶ゟの先陣ゟ義向る軍の検使として
井伊ゟ新出政知毎中務少輔お給ふ同十四日清洲ゟ着てゟく〻
遠岡〻 佛出ゟを信長ゟり井伊知毎ハ佛出ゟ迎引の習ゟ味方
ゟ愛あんゟるをゟゟ〻〻京〻使を以くゟかひゟり八月廿一日の
晩方関東ゟり 佛使として村越茂助吉忠清洲ゟ来る 佛書
を信方ゟの佛書ゟ井伊知毎 佛出馬のゟを中ハ敵味方分明
ゟ〻〻いゟ〻 佛出馬あんといゟ毎人ゟおとろき信ゟ対面して
ゟ〻出ゟを中ゟと申〻〻四ゟめを羅ハ郡て毎人ゟ智ゟ知〻と
ゟ京知ゟとゟけゟひゟり信方ゟの佛書ハ
ゟ〻許様様京ゟゟ村越茂助中山出羽合ゟゟ〻伝

親ゟ出馬ゟ家ゟ名ゟ池田ゟ出ゟ馬ゟ細ゟ上中ゟ出ゟ
渡て

八月十三日

福信ゟ衆方ゟ〻〻
池田三ゟ衆方〻
陳ゟ衆ゟ〻〻
足田甲斐ゟ〻〻
京極修理亮〻〻
加藤ゟ馬助〻〻

信将合合て福信ゟ屋敷ゟ佛書を取ゟ茂助を取
茂助ゟ〻ゟゟゟゟゟゟ別ゟ〻遍ゟの入ゟゟゟハ他人を〻〻

義昭公ハ信長とそむきつるまゝ上洛の儀ハ今度
ハ使者を遣ハしまつたくこれ申せとのゝ給ふ
仕うまつり出るに人〻 信忠馬を乗るゝに義昭ハ只今
いまハ使者ハ右四方より義しゆ拾ゝ敵の要害ハ一つも義昭
こゝろの大勢と敵方との手切の軍一度もなされハ敵味方の
明るゝ所なし山ゝ波皐ゝ義昭ハ息 信忠馬ハ一とゝひられて井伊
和泉も大ゝ所を消して奥さまに福徳西則度を立て義昭
そなへうて扇をひらき義昭をあふきあゝ能もやされゝ
村親度なる人数の中ゝ一人もいんいつゝゝ
徳川殿の思召をつゝ一毎のうちより川を越息彼皐を せ免
義しゆ中ゝそれを出るゝ仕ゝ村親度遣ゝて足和ゝ

ゆゝれゝと中れゝ義昭ハ義昭ハ義昭ハ使者ゝ
以福徳ゝ和ゝ井伊和泉ゝ
中ゝ人ゝ細ゝ
福徳ゝの法大勢者一紙の指図同をとゝのゝく村親ゝ
中れゝ

（ゝ時の村親ゝ日ゝ ゝゝ世ゝ今ゝ ゝ城ゝ ゝ加義ゝ ゝ名ゝ ゝ信ゝ ゝ義ゝ
あれゝ時の日ゝ村親ゝ ゝ村親ゝ ゝ出ゝ ゝ義味方の義城ゝ ゝ別ゝ）

親信ゝ一揆ゝ

同八月廿日親信ゝ礼ゝ城ゝ義智秀治ハ生ゝ春日山の
城ゝ京極ハ越州ハ田ゝ民をかゝ一揆を起させゝ
奥越の堺ゝ要害ゝ ゝ下倉城ハ城ゝ小倉ゝ腰三ゝ
加賀ゝ ゝ八月廿日一揆ゝ ゝ防戦ゝ
腰ゝ ゝ丹後ゝ秀治ゝ城壁和ゝ二男 ゝ城ハ城戸城

を（口方石を脱せり）手に二十支ありて板法せんと其郡屋敷いさめく山城へ入り一
揆よせハ危うんといふ事聞つ入一揆等よせさるに依て脇を足数
しるハ武士の主従まつれハとく板法せんとく夜中に打立て
翌三日の辰の刻九里の知をもて付く下倉の城よりひしく戦
始されども一揆方へ討死しうりう丹波ハ一揆を追
くつて首数三百打とる一揆等ハ書よを庄田川といふ処より垂小千
谷を急の方へ蜂起して四日町の川向より陣を丹波ことれをこて
まつ先よりすこれハ速水織部山中数馬板陣としてうつてかゝる
一揆息絶ふして首二百級をはうり一揆の方ハ九田刑部兵衛新右
衛門等水内ふしうりそ度丹後ハ働板羅なりとそ中なる
又三条城板よハ城雅楽助堅物（城堅物なり）ことも一揆蜂起して三日まく

せめうりう雅楽ハ郡人山中兵右衛門城又兵衛井口平兵衛等よく
戦く一揆数百人を討とる又堅物ハ三条の板法せんとく春日やま
うり出張せり行程八里ありて先陣ハ柏崎よりこ方よ先三条下ケの
安宅を堅んうるよ使志をもせく村上城を固防す長明寺法うり第四
よ藤口伯耆守宮勝兵部義王山よ城員作る新吉下倉よハ小倉
を脇櫟尾（とちお）よ弟子四八方つ三条護摩堂よ城雅楽助亜飯等ハ
方へ一揆撃訓のよを苦くうりう仍く藤口村上中合せ付来因よ
出川を渡りよ一揆等とおううこよ追ちく陀川を渡り石泉と
いふ処よ出こよ一揆等城をほりた居をうまく三百人たり
萱地よ伏せ藤口村上かくとたりて火急よ見をうちるゆへ百
五十人うちれりそれより一里を隔く撃ちよいうり又一揆を

追ちゝ搦手山上よりをしよせ候を四〜三番よりうちかゝれ
一揆等城をうしなふる縣し村上藩口城が吾ともをうく坂法大
勢なりとくさとくくまけたるゝ時城丹後守方へ
家康公 秀忠公より 御書あり
秀忠公の 御書八月九日の日付なり
家康公の 御書八月 七日なりいつきと上田居まく首百
級とをり

小國大聖寺責山口文子討死之事

又上方まく八石田増田大谷等打まく小西表の大将より江列の
四主作ゝ木右馬作義弼ゝ息男作ゝ木右京亮智義卿を立て
大将とせんとくく三成より使者を以くゆきしれい義乃大勢
秀頼公生害の刻石田ゝ落をまく罪なくして数代の本城を没
収せゝれをき恨四時をいうゝ石田より与せんとく一人の使者の首
を切ゝ一人を八返りゝ小西切出大よいりて義卿を討んといふ
三成かゝ制して大ゝのおの小車なりとくくえりこれよ
りて山口玄蕃允正弘息右京亮倍弘成田居城を加州大
聖寺へきし城をうまへ歩りゝ
加賀前田利勝ハ東西の手合として七月廿四日金沢を出法て
濃川を取川を打渡り三田山より陣し武州より昌信中をとめ意
小松城を押へさせゝ金沢への通路を法なく源四郎利政六軍
を引ゝ大聖寺へをくゝ山口文子能ふせゝ武時小松城を丹羽
氏長重を呼寄て石田方を裏ひゝ小松方の

行候足軽して怪幸を引入り城大寺云ふ八郎輪橋より
見怪を出し手付敵をうちたるふ八月二日戦ひ夜に入く
お虎口をくり引くく三日の未明より八孫四郎高よりをんく大聖
寺を乗落さんと共家人高橋弥二兵衛沢田市郎兵衛大鋸
郎兵衛等先陣を乗切り義干うこれ前田の先陣富田
義を自らよく戦く柵をつくり破り城をこへ城よりつくんと
せしに強炮多く義を膳節よりあるたをれるう立あるん
としれとも立るうるいせして強を持く門きハまくすを
乗て戦ひ強よ討死しけり
此富田義をといふものハ法師武者なり家この功名られ
なき勇士なるを関白秀吉の義をを召出され一万石を
賜りけり秀吉生害の時義を殉死せんとく小地の住堂を
はらうしに人ことめく自分の義をして一万石ハとうう
市のこ秀吉の恩なり殉死者用といふ義をもはんして
強堂をうう(除大将の足軽ををひしを面目なく
やあるひらん西山よりられ居しを加州金田利勝少及ひく
家方へかへしなり殉死ハ報むるなり彼ら言ふを用ん
とく義をなを強し一万石の義地と四郎とく義をよ一
万石をあくれり今度ふ忠の孔出来しよ利勝彼を先
陣ニ用ひられ
とうや
翌四日未明より大聖寺をきひく責破り城かへくく
城を山口玄蕃允子息右京亮成田左衛門佐田

又六郎杉井宗助以下之二百人ハ五位の合戦してかとく〳〵
討死ス首数百四十四級なり山口又ろう勇敢をゝんしたり

小國淺井殿合戦之事

昨日大聖寺城せめ落ハ前田兄弟ハ加賀越前の境細呂木と
ふ処ニ立を奪ひ一方にハ前田ろう郎ハ中川宗半ト共ニ又
ハ立をとり関東方の城ハ落城ようて西面ハ大谷ろう兵衛
敷野城より和ようひ金沢を責むへきよりもり用ん寺へし
と皆ハ前田兄弟陣ハ知されハ立て勢を動ス事へしとて
細呂木より金沢へ引入り付ハ前ろう兵陣山塚ちつる山
南坊ハ前田但馬ハ北九ハ左ろう四組を引分けハ寺城より
小松を押へ本陣をうちよりハ右の四組を引入小松城より出

して引ん事と思ひ寄ろう所ハ丹羽長秀ハ小松城ハ途中より軍せんと長
久を四ふ所長岡藤孝ハ十方院ハ前田ろう かまいて此方より
とうまいぬうようとふ所ハ江口三郎右ろうハ目ハを敵の海ようを
まハ寄るまゝ長秀ハ前ろうとのそむき立ハ前ん〳〵淺井殿へ出
るにハ前ろう先陣ハ新ろう海ハ敵の勢よろひ付
ろう事勢已ハ二千人ハ過さりろう松村孫三郎といふ人の一
番ようを家入るせまゝ殿より敵ろう敵ろう出ハ長九郎
おもさハろう軍ハ馬より下ろう敵ろう前ハ丹羽ろう方へ首
六四級と前田九日又海方ようを三て戦ひろう丹羽ろう魁ハ帰
次ハ文ふ破ハ立ハ長右衛門討死ス安藤ろ伯ハ文ハ前田小ハ右衛門成田
助九郎能ハろひく前ろう軍士つき崩さるその中に水越縫殿助

力戦せ松平久兵衛ハ敵ニ強く攻かゝる太田ハ家子岩田伝右衛
門ハ敵ニ逃井上勘兵衛ハ後を合せて上杉を馬おゝ引く丹羽方
ハ改田国平次田助九郎小笠原犬頭助江口三郎右衛門太田方を
つき立くおきりそく処へ猪木原左吏と云ものの縄うけ有て突入
く戦ふ生日も暮く又おゝ引せ江口三郎右衛門ハ畔を伝ひ山上ま
陣をとるいくさハなりうり皆人江口ハ勇猛を感しりり太田
方ハ威状を出りりる丹羽方ハ出させ見ハ丹羽方ハ
太田方ハ突立れ相の比方へ引さるものるまく威状す
利勝方家人松平久兵衛ハ此時の一番槍なり此久兵衛ハ三河ハ
三百石なりしかる九月七百石を加増し一百石ハ先年の外
後を合せ一万ハ三千石ハ加増しなり利勝ハ度江口方先
ゑを川さんと言山南ハ方ハ触場処ハまちうけしハ江口氏功の侍
まく唯一騎ハまりう人数を懸く引れたゝ言山ハ軍兵を空
くせりる古今の勇士なりと江口を大きゝ賞美しなり
江口三郎ハ小松藩士の坂宰人して結城義つ秀康ハ
左衛門ハれ江口石見ハと名のりそ子三郎と中なる又家田孫兵
衛家ハ浪れ石田方ハ奴ハなり
西国修験宇土藩城野州尾別徳州ハ云ハ
日向国懸県の城主馬飼理左吏西紙肥前国平戸城を松浦
肥前入左法京国出大村城主大村彩八郎ハ西海道ハの法ハ
小西行長方ハ秀頼ハの作なりとく関東追討のるを中
ゑ法大村彩八ハ秀頼ハ初身ハまくして何のとんちやく

是石田の奸謀なりといふまゝ皆一同に同心して下の関より引
返し居城くまを引こもれり（小西の使を受て話相下関へ出くわし読ゼラル大村
口上を受くて下の関より引うつしなるとゝや）
こゝに宇土城を小西行長ハ石田治一の与党なれハ大坂より振しり
うこさせくまなの城を加藤清正ハ
家康公の味方なれハくまもとを打立て宇土を攻んとて本山
越を経て宇土を出て行程これより三里ばかり城よりはせ来る
者ども清正の旗なハ大白山に陣を取宇土城ハ南条元宅
ら護して城内へ入んと塩田口へ出くわしる
如く三宅角右衛門といふ宇土人竜城して帰りて元宅を付く清正へ
申ハ出せんとあるし清正の家人阪田角兵衛内毎て申ハ彼
三宅大身の旗を付くて元宅ハ口脇より耳のさいまくつきりする

元宅ハ大力也（三宅ハ旗をうばんとする如く元宅ハ方人大勢なる
也）三宅ハ生場をまけ退く清正ハ戦ハせして城をうけ入んと思ひ
へらるゝ時ハ清正の家人伊東新左衛門坂川忠兵衛佐久間角田井村
長右衛門田中吉兵衛日下部与兵衛（長ハ清水伯耆守とゝ申すのなり）をんく勇をあらはし斯ハ
大村新八ハ家人金里新左衛門ハ強弾百五十挺つけて清正へ加勢せ
郡衆の板清正より出るを
家康公へ申されく 作戦の作を為しとゝや又清正より家人
なり能ゝ強弾の左三百挺人をくゝ宇土城をせくゝ為ハ
八代へ出張せ清正ハて吉村吉左衛門吉林集人毎人を小川
表へ向らるに乗よ為くく清正ハ家人お田様ハ城内ハ能ゝ
を付とるゝ城ハ八月十五日より十月迄責れとも落せ（此時候考へ清正

四千七百人二千よりたり（吉村右京亮）獨り清正のみ
先うけ仮田角系表弥左文庫林集人三宅義加百助
（清正の謂）より親ふ城方南条元宅より防ぐ親ひろ元を日も有く
城を拾ひ取り助城和（出）く敵の竹束をやんとせを清正の部
曽逆川忠氏部足出し拾ひを拾ひを合せ拾ひ逆川より
如を日下部与助兵と親ふ後ひく田中吉助山田左右衛門伊右
兵衛を合せ弱卒に（此名録考）南条元宅と親ふ南条ハ大力なる
ゆへ強く元宅を陰襲をつかこ元宅をせとりしとや
（治乱記ハの不の文章を見るにまさしく清正ハ弱卒に元宅を討ると見ること考へ）清正ハ
のこ左に孫右を与へしとなり宇土城うけ取く加藤左馬
兵衛全右つよりせり（治乱記ハ元宅を城をの拾ひ取り八代城ハ
小西集人ゆるなり考へ）

吉村吉右衛門拾ひ取り（此文考へ）宇土まて城兵の勇あるもの
多く清正へ投拾ひ仮田角系表拾ひ助三宅角左衛逆川
忠氏部日下部与助田中吉助ハ農夫を陰襲せり
又九鬼大隅守加隆ハ石田より八月十七日より紀尾屋三ケ島乃
浦こ発向し手巻せり来弱菅平左衛門定一処をうせむ
隅州の嬬子九鬼出つるハ
家康公より使ひ来島へ下向せ出つる岩城を攻れり
之新ひく彼遅とるより
徳川殿の陣おとと成稲葉ハ理を拾九鬼ハ捕ける成とや
されハ稲葉石田より寄せハ家ハ
徳川より注ん稲葉

徳川より根ざ家八石田より来せんと
とうや紙とも又ゐおとられるハ家名を永く傳んとおもふ故と
を学んで又壹萬俵馬を指利西尾丹後守殿ハ関東へ
し稲葉那上の城を初めひろう此時より金森兵部八吉近入道宗旦
法京子息出雲守可重ハ東西より来り壹萬西尾より加る此時
稲葉右京亮通子息長六典通ハ尾州大山城より来り此度
学く根岸の為より来り財より稲葉ふハ壹萬西尾と八日比より伏
なる也へ云ひけるひとく戦しうえ来稲葉ハ
内府へ志を感せし也へ根岸をやあるひん彩のき根をすてゝ和な
をとゝのへくた山へそ引入るそ芝中村一角一忠八羽黒色より薄て
大山の麓より又徳州最位の人くまハ初め徳永下総守昌時入道
法京子息左馬助寿昌今尾より市橋下総守正綱ハ関東方と
く彼城ましてたゞ守る須城ハ言来八ふ来府石田より手しく
篭城そこて徳永法京ハ福島正則と同しく上りて居る言来を
さとて味方とせんとん言来たりて一せ免せあられく味を渡
さんとふ徳永ハ上を福島より福島殺害ハ徳永ひくよ
中により徳永を先るとて八月廿一日より須城へ初よせ徳永
勢八先へ城内へ込入る福島より勢をおく打入処より言来為ての係
なれ二度より矢石を放しるに家子の子負死人為手ありさ
とも福島より云ハ初なれ右先方のく根せを福島いりてを
為なるは美よとく攻しるとも為くくりきやうまてらへしる
るなれハ為より八攻られを時より今尾城より市橋下総守出

福島の軍を引入るゝ事ハ城を出て小舟より高槻へ
退るゝ西則法師より向ひ足下のそこつ中ゝ様有ゝ
云ハケ様の事に到るゝ由ゝ軍を兵合せふ兵ハせさるゝといひ
由ゝ法師大きゝ驚つ西則ハ清洲へ帰りゝ
石田清州出張法師を濃ゝ
石田ハ美東方馳上ると雖ゝ途中まゝ一戦せんとゝ八月十六日
自大垣出張ゝ伊ゝ人ゝ
美濃国美濃小西行長福原直高竹腰尼家絶和泉
秋宣秋月種家高橋右馬助九鬼嘉隆木村越前守長束治部
以下二万三千六百余騎東美濃ゝ都ゝ彼皐城ゝ彼皐中納言
秀信信長の孫信忠の子ゝ籠城ゝ三千ゝ
ゝりかゝりとして柏原表ゝ河渡表ゝ馬助等に千余騎をゝて押寄
ゝ山ゝ者ゝゝ又尾別ゝ山ゝ石川備前守二九ハ加賀の大将
福島左衛門尉子息長ゝ兵衛国ゝ一政兼秀秋ゝの弓鉄炮の
和泉ゝ大垣ゝ大垣の城ゝ濃ゝハ中九福原右馬助二九熊谷
内蔵助木村宗右衛門尉足軽ゝ三九ハ高橋九郎秋月三郎
高橋左衛門尉ゝ東内ゝ東南ゝ兵ゝ兵ゝ兵ゝハ兵ゝ兵ゝ兵ゝ東美
濃ゝ向ゝゝ石田下知ゝて西ゝゝ
の熊谷ゝと口論仕ゝ伊勢ゝ
ゝ兵ゝ伝ゝ石田ゝ制ゝゝ
味方打せゝふ古の猛者ゝゝ中ゝ又勢州長島城ゝハ
福島掃部頭西軍関東方ゝて彼城ゝ山岳の切所

加勢して三万余騎七百八十余人こもれり是は去る廿日秀吉
小山より出いでまし給ひて毎人をもて石田より京
阪城を亂房に八百余騎をもつてくも伯へ向ひ給ひ石田の城
を左陣し夫軍のこゝろをしらず

東国勢河戸川木曽川を渡り濃尾に着る事
細川忠興出てして彼尾の城を攻んとす彼方先陣は浅野
よりく掛つゝれ福島正則を井伊直政毎に軍監也池田輝政
中なるハ三河吉江の先ハ桑田知ゝ為ゝ自由なれ
ら三福島ハ自由なれハ赤いろ自由なれ
河下の義弘の渡りより尾張の渡りを打渡くハ西刑ハ
あけられよそれをおもうて川上をもつて為んとゝふ福島

ゝと同しなゝ上の衆ハ敵合ちゝさ曽宮く出くふせん此ゝハ
軍ちやくなゝん時ゝハ西刑ゝ功高ゝん曽宮の為ゝ小の方の
渡りゝ池田三左ゝ三河吉江福島の勢濃飛者長曽ゝ為ゝと
して聚ゝ河田の渡りを渡ゝ先ゝの勢ハ美濃刑渡の渡りを
渡ゝ来ゝ中ゝれハ皆ゝ美ゝ同ゝ福島正則加藤嘉明黒田
長政京極高知生駒正一を乗家清洲をゝ池田輝政中なるハ
敵と戦ゝて和さゝと成ゝ和ん敵ゝ本ゝ為ゝ中ゝれハ
中島井伊中ハ敵ゝも和さゝ為ゝ自分の勇をたけこたま流
ゝも

清川原の為ゝ人ゝ濃ひ駆ふゝ池田原ゝハ仙合ゝ為ゝと
中ゝれハ評定決ゝて池田輝政濃飛者長為馬先一柳直末堀尾忠氏

木下右衛門ハ莊京の渡りを越西堂徳寺まいる敵の足軽も
出向ひ弓鉄炮を放しかけ息も継はせひ尾越の渡をさし
来り村の屋敷をことごとく焼たてひハ月廿一日の夜ハ来り村の
焼け陣しかけりをこれ廿二日未明ハ池田井伊右衛門勢敵
合をうくしてすむ莊京尾越しの心の方に入かゝる皆く
川を見つけ山付後地堀尾山内忠馬木下一柳ハ川原ハ押寄
く川を渡んとこつくろふおのの軍士池田の勢ハ心の方ハ
後に清皐城より百と越おち敷ふんを引く河戸川をお
ハ尚 庄の村の南と西ハ向ひ敵三なられ皆く敵見てハ打
さんとこつくろう一柳丹羽ハ出羽国ハ皆く知り
義く川の渡ふをこつくろうハ川下二俣ハ陣せ 敵軍

を見をまねきこなる時り義る本曽川の南より馬をうち入く合ハ
引て墨伊豆村 船橋村の間をせ毎て浜村のうけより敵百と
越おちる陣の後へこそハ出ようこれをこく池田浜地堀尾内
一柳ハ敵の後へまわりこるハ見めやくとてあけ羽の蝶の旗遠ひ
雪の羽家この旗ともに河田の渡りハ打入渡りるを波皐勢ハ
渡せとふせく百こう勢ハおの後ハ出さまれけひこくこくこう
後ハ入れこう先ハ百こう方より秀信（岩こう）これハ中納云秀信見
後ハ出こく上加納と川を町この間なる忠んま蒙に出張ト百と
をこくひしこくもおの後ハつまれて百と後心を後田義勝
子息義三郎もこゝに来りて引返さんとすれを後立てる
軍なれハ叶ハ来て後田又ハ赤後ハ右けてこんうに

百こと津田と一処より引をくれ河内ハ筒井くハ六七度迄戦ひて
おつくと引入りり東西方ハ蒲生又四郎黄母衣うけてすすむ
伊沢勘平と川ハへなせ来りて西国方の薮田権右衛門を討とる
池田輝政ハ東池田備中守も若き者ハ軍功を励し有り度死人多く出ハ
組を討取り池田方も軍功を励し有り度死人多く出ハ
川尻鎮茂ハ陣を張又三番を張の勢も東西勢の川を
渡りを見て混乱して川を渡る 秀吉勢横合より入りて三番張
の勢ハ負いろ見てしりハ味方より味方を切
しもみ立し也 討るもの為ハ数知ず 池田孫七郎ハ河上をなせ
組く味造ようつくりり勝利戦ハ敗れも張ハ味造打負て
敗北せりこと 羽柴秀吉尾張の軍勢福島細川加藤黒田藤堂
京極田中 云 紀 同子息 民 紀 生駒 一云 寺沢 庄 堀次賀 玉 孫 井伊 女 多賀 萩原
の渡り西美濃より渡り如こ多いりをあつめ尾張を渡りお岸の
狼煙を上ると敵地を敗失し右帝 塘 陣しり敗る而に
ゑめ多の後ハ敗ハ合戦し猪利を得ると変て成の利と
打立て秀吉の城下来本京より押詰り秀吉の城ハ美つ秀信
の多勢ハ七百騎美ハ石田ハ加勢相京又ハ多後騎ハ秀吉
のふもと摺鉢寺三ケ所ハ堅てをうまへこてにく防んとを打る

秀吉味方美濃河戸軍付京猪後ハ之義光事

ハ後も明く八月廿三日の寅の別より福島以下の後ハ鞭屋町
口迄つまくおりよせ後ハ方に言町をせん敗る別摺鉢のの
岩ハむろ福島加藤細川以下のをハ迄うまへをせめ敗る池田

井伊直政家臣抽く城をせめ敵こゝのとゝの家矢さけ
ひの高地をふるふ福島伯耆守先陣として勇をなせむ相原義為
本戸を開くつき出く戰ひ怪を負ひ終死を苦たまり力戰
して相原まもく討死一首八歳物語ふ佐藤四郎
と苦戰して討死せ川流れ馬九八大野の中をきりぬけて九
まいり秀信と一処よりとうて破れく佐野一家ハ彼皐城攻
ゝ体池田八尚地の兵内ゝ高なれい彼皐の山の根より九九せめ
かゝる城中ハ瓜の紋の赤旗を家ゝの旗をひるゝ上家ハ
上羽の蝶の旗ハ城のうゝまいる巴字遠藤羽後巴の九三つ相
九曜星三つ巴蛇の目九の橋立菱九ま書行豊車日目結笠の
旗秋日ゝかゝやゝ城のゝ七曲口ハ本造ゝ佐藤四郎ゝ
笹三郎百ゝ戦高畑又ゝ笹ゝ高ゝ
ゝれハ津田本造百ゝ二ゝ津ゝ討して戰ふ時ゝ福島ゝ
家人武田掃部助津田新十郎浜野ゝ孫ゝ
ゝ十郎小姓助六城田小三郎ゝ井相豊八浦ゝ十郎武藤清兵衛
稲熊平ゝ高笹十一人先ゝ言名ゝ田家人可児才蔵ゝ抽て
首三つを取ゝ城ゝも切ゝ武藤ゝの目近ゝ度近小返し
して戰ひゝ中ゝ津田藤三郎ハ赤ほゝ切殿して武をふ
ふ細川ゝ家人ゝ田ゝ物ハ津田と藤員せんとかゝりを津田
ゝをさけく高田ゝ首をとゝ高高田ゝ傷家柳田史助くせゝを
生弱平三郎柳田と組ゝ生ゝ首をとゝ又細川ゝ
家人浜村七八ハ城ゝ中修修ゝ討ゝ武藤ゝも破られく

和光院殿より七月廿六日よりも陣ハ時福島ら家人吉村五郎
兵衛を使ひつかはしのやうにのりよるおつくるものゝ
ゆゑ人ハ急さう京極宮知ハ蒲神の河岸田徳理ら古屋敷達目口とゝ
ふ所せ先のほる福島池田ら勢軍勢ハ彼皐の町口より也福島
ら云ともやゝ乃ち居よりれハ池田ら勢ハ追ハ先民
屋をやけたゝふ池田ら板陣ハ大坂ハ先途をふさけられ業本京へ
まゐり出柄川の急より出くれのよりせあ何ら強よの云ども
四急よまゐるとひとゝ一度よせあかく陣池田ら強ハ引ら
をんゝ上羽の蝶の旗を和光院へ与けハ一番ハ輝政なりと呼
りて和光院へこゝハ入ら此時城中より浅井左兵衛尉義勝ら出
本造左馬佐和の門より出く笠を上ら矢尚をこひゝ和平を

こふく彼皐の城陣ハ秀信ハ自害せんといひけるも
福島いゝりゝ中ハ此人ハ信長の婿孫なり田好とする人ゝ
ゝ食をたべく秀信ハ尾別へ新き刺殺して言ハ出へより
いく行きて病死ハ絶ひらゝ石田ハ秀信を生くんとく
浅津義弘とたに八月廿三日吕久河戸色色にあり出そよ先陣
石田ら云ハ石田勢九名清軍名勢よ人卒ハ河戸慌よ出
張ハ此ハ石田ハ稲葉ふ一族ら家人ハ婦川合戦の時大なる
働あり別のゝなり石田ら和を言ハ高沢ハ家の
先陣よゝ清ら云よ又東西方の大将黒田筑前中兄弟
生弱松下勇ハ彼皐の家よなれも不ふ業問思へおくして
ハいや彼皐城ハ多にありぬを云ゝよ石田ら云ハ

場結ゝ為ると雖ども其の兵（と）收ひ各河戸より見れと
川流るゝきり流（さ）れ時ゝ田中を経て政ゝ家人
河戸三郎義流を為如し大当家と名乗
ゝ添しゝり（自是三郎ゝ名字を河戸と名乗るといつゝ云れとも又
私ゝ此書ゝイ書ゝ遠ひあゝ考（し）石の百姓ゝといふ説ゝ）法軍
これをゝ一家ゝ見ゝ其の恙先ハ戸川肥後ゝ西利 業山お稙ゝ
一員村城ゝ兵庫助ゝ為ゝ石田ゝ軍士法ゝ手しゝ法勢一家ゝ
ゝ石田勢のゝ（ゝ）旦てをゝ松江と敵と二ゝ分て
家康の敵ゝ為ゝ為れゝ大勢為れハ石田方ゝ
ゝ打ちゝ為れを退ける一里半中ゝ黒田ゝ政ゝ
士卒に先ゝ打ちゝ退ける石田ゝ家人河戸ゝ新助ゝ
しゝ甲斐ゝと戦ひゝ政ゝ為ゝ為ゝ大勝ゝ

敵のゝ手前ゝ敗を見すれゝ苦戦しゝ石田ゝ勢松江勢
ハをゝれゝ左前を右川ゝと引れゝ田中ゝ手にゝ
此時石田治部ゝ内ゝ食義して先陣をゝ
ゝ多ハ微運の程と見ゝ引ゝ石田を治部も大坂へ引入ゝ
法勢の方ゝ八月廿三日彼岸前ゝ江戸へ中ゝ井伊
如毎ハ廿二日ゝ萩原尾城を城彼岸へ紙ゝを中ゝ仍て
法勢へ書を与ゝ御文云彼岸へ御ゝ働ゝ井伊
如毎ゝ中城承知ゝ御文云八月廿四日の日付ゝ法勢
佐竹吉田佐渡殿左京亮 黒田甲斐守 加藤左馬助 毋彼宰相
一の御書ゝ又彼岸前ゝ秀信の分乃上ゝ法勢の功労
井伊中ゝ中上ゝ使ゝ廿七日ゝ目録ゝ上ゝ

沸横姫大方なる所に此時
秀忠公ハ位列表四表ヨリ沸在陣ゆゑ源四郎位せ
位列より
家康公へ書を送る 沸函事八月廿八日の日付なり 沸文に
波辰蔵城左京亮反覆致るの功 沸酒井兼次郎日 沸出馬
の旨を
秀忠公乃出るの出 思召るの 沸文云なり
ふくよ上杉景勝ハ石田ヨリ一密ゝよを隣の法将をうらふ
中ヨリ羽州山形乃城を二れ上出羽守義光へ使志をゆく弥ん沸ま
中入沸
これ上の家ハ伊豫守源義経卿の末系修理亮義教と

以人人ヨ九十八代崇光院沸宇延文元年八月六日羽州
按察使将軍に補せ沸 源氏の民の
治世なり
らの如乃押領使ゝて世宇ヨ五国一康暦元年六月八日
辛去せり 嫡子右京亮家元子修理亮 沸出その子
修理亮 沸家元子修理亮義春元子右京亮義秋元子
治部少輔沸氏元子左衛門佐義澤元子義定その子義当
今義光まゝ十一代なり 沸宇位下ゆゑ出羽守ヨ位し
氏を羽州ヨ名るし宇中ゆゑの大名なり
義光ハ使志をゆく嫡子修理亮義康二男弾正少弼義親
一族ヨハ清水左義お捕大山内脇正上山云郎お播山聖急右衛尉
楯岩甲斐守宇庄光前守志村左衛門義 板伊豆
とゆ 板上紀伊守帝

は雑賀孫市郎氏家と近江沢能登守家江肥前守
對馬宗根源右衛門相伯耆前瀬沢兵庫等を招き是を問ふ
一決せざる処に義光中門より幼稚の秀頼公何のはとんちやく色
つきなくそれ〳〵数多
徳川の意志を知らんとて上京勝先生を出し居内をせめ
れ〳〵その者相そなやませ同人をまと中門より時に雑賀孫
中ハ出よとともそれ〳〵是非を求めらるに上杉家ハ徳任以来
の勇将多く殊に宗兵衛二の大名なりを人う
徳川殿と戦んと思ふれハ宗兵衛乃物も一味の人多くんうを
上京勝う兵を他出せ汐法もなく終れハ金沢(あり)まりて
大勢なるんとふ素内の敵地(小勢まく)はるうハ能とりこまく

ハ中と為の新くハこうせんとは返るまるく比新を
徳川殿(出)陣へきうなんなん扱ハ京勝いう尚出(よせ来
うん終んん時ハ上の山七谷営以下の城こ(を)こめ(れ)日数をお
くるハ京勝いつりて和睦せんと申新くこうこの他所を引て
合戦せん出ほとるるは敵を出中(をひきいれ合戦するなふ
危きるハ中敵ハたるかのを途を絶て兵粮とふ自生まく
人馬もつれ扱ハ毎く徳ハすくなく味方ハ自出なれハ徳多く
扱おしといまあ〳〵ハ義光うの使をを(て)多ハ上一味せんと
中意〳〵を新を又馬まく江戸(注を)せられるそれより義光
金津城の城こ警法如よして兵粮をこめかぎの兵を入垂
なり又こを原京勝より一味るるのをを中新軍用の為とく

黄金白銀二宮を吏部数十走るに義光光を遣さんといふ時
如庵光をいさめ〳〵これを遣さい一味なんと有るに四〇以前の孫
五郎とをなん金をとゝのゆるに三つの酒あり一つは味方なりと有る
酒二つは山形を味方とあるひせめ来るに義信ト心易く出
来せん三つは金銀をうに多くれハ法士のほゝひ民百姓の為も
よし給れとも此金をとりて
家康公と約束をとゝく京勝〇紙せられハそれを持日のそりを
うけん先さへたゝハ先て此金ハとり酒をいさめ〳〵ハ金銀を
受納して使者をゝ〇〇〇
柿々度義光ゝ
家康公〇属するるハ去る文禄元年に奥州九戸一揆の
時関白秀吉出陣あり〇〇時
酒川殿を同く市向さ〇〇時宮上義光二男左馬助を召さ〇〇
く
家康公の御陣〇まいり此小冠者を御例まゝ召仕れ給ふる
〇〇〇〇〇
酒川殿御悦ひ忠もの子息を以
家康ゝ殺害とする〇〇〇〇〇

奥羽諸將山形へ出せ集る同諸將心懸りとする

上方ハ今孔なれども出羽奥列ハいまゝ靜謐のていなりしに

家康より内記の御書と義光へ遣れ七月十一日の着る山形へ

着せ報知するに石田上方まゝ諸報ある由今津御書四ハさて

ゆられ御上洛なり今津表のゝ形ハ思ひよる御書なりその

御の諸將へも同しく御書を出るこれゝハ又いそ孔山形へせあ

つまれゝの御書なり伝く諸將をせ集るゝ者ハ第諸伝書

五千人秋田東北帝二千六百五十人戸沢帝二千二百人佐竹

陸七帝四百人六郷三庫孔三百人赤尾孫左帝二百人仁加保三庫

百八十五人瀧沢刑部百十人内藤孫四帝六十四人山名石三郎四十

人都合一万千百四十九人なりこゝ遠雪すゝと紙を

この孔諸文今ハ三孔上の部ハ拾山形

あ得ってこれありとそ

その〳〵義光のあて不ずして源氏

より同名を除く今津へ孔入せ〳〵米沢口へ出して押せ

〳〵米沢口の大将ハ義光の嫡子義康手勢六千五百人

諸將の軍勢を合く一万七千六百四十余人南部信濃守先ゝと

く限しと打立て日ハ山形を目ハ陣しゝり給へ上方よりの

飛脚諸將の方へ遣ゝと来りて伏見大津の蔵屋敷ハ

家康ハ今津出馬ハゝて西孔ハ御父子ともに東海道中仙道

二手まゝ上洛あれハ奥列下向ハ御ひとゝすと告しらハ

諸將ハ孔相ゝ諸事孔迷なハ家ゝ御用ゝも一撰四えなり先

自出を諸く相を相ハゝもかくとせんとゝく急ゝ起請文を遣

雪して義光へ申ゝ誓ゝあいてふゝめ孔仮地へまけうる

此時義光の臣延沢能登守経延親子里見弾正三人義光へ
くとゆ追うけく討死へしとゆれハ義光大怒の
討く益もなし能よ仮用をあるふはとゆうそ家よ
をハ敵よ放まし なまねよ追うけうなくハ者として敵となし
らんそれそハうまくより人の合力をたのむ心なりとて追せ
さりけり

丹地与三左衛門智深こと

羽州金山の番ハ丹地与三左衛門と云隠居のきこえ人よ新井書
物ゆに下方の大名を引うつ中れいう物見ハ京勝一一
味するそと心ゆく儀よ深をもうけく本戸をうむ法ハ
ふこよ為りて丹地方へ使を出し義光をはゆふまく仮用の一揆
方へ使を出すより毎へ給へとゆ遣せ与三左衛門返事に答いまく
明く記の強も見せて引うへし給ふハ金銀一味とあれハ遣
給へとく使者を久ふ使者へうくひ遣せとゆ遣すへしを習ハ彼
要害を設るに鉄炮火なハをはくきひくく並ふ処数百挺
又射手矢たもといくひくうちの山こよハ白をく赤をく者
くして怪なくつろけをトまろひ武者数百人並居あり
なと鬨をうり法螺もあくこ給ひうあ彼くへ遣へんまハ
いまく猪員の声れぬ中四へ鉄鉄をあるひたをなるれ者ハくく
をくく義光より丹地方へ遣へとくく遣へうり鉄ふきけハ
鉄炮といふハ事ふより美くく猪なううり者うくしる雑と見

せいらくひとを一町くまとれるなりまちひ武ちとえ
をもの村ちより信俗男女をあつめてほのくさ処を重る
なり洲よ道花の智深うるとて自ら他ものたれをたなる
感給ひなり

豊臣秀吉公紀卷第四十六

目録

家康公関東を發し内義軍揚屋食俗ること
江州大津城責付落城ること
大友一撰付本付実おち山軍
義黒田如水怪謀ること
大友義統為黒田如水虜付安芸冨其海城軍ること
宇喜多秀家衝策入ること
石田疑秀秋を属院付小西夜討評定ること
濃州株瀬城軍付小西軍奥見
義 石田光下門退関ヶ原事

関ヶ原合戦付忠告言名の事

石田三成敗北付家康江籠城軍事

金吾秀秋裏切付大谷平塚死期

并浮津殿討死之事

家康卿関東進發付内府軍勝負会議事

村越茂助尾州より参りて法螺の貝信等抜き紙を御目に
かけまゝ八ツ時分有て後茂助より受けられ別江戸出を
後藤のんと出ふまを有て　に立て清洲合戦早馬来り
彼皐藤撰浜を出又奥州の飛脚来て京猪法方へ手
紙　出羽出へ書状を仍て山形出羽守義光ものゝ
義ひ一さん猪利を設れとも平竟尾花れハ法勢を
詳宮ものゝされた　家康公とゝ根本の石田をうゝハ
主殺逆の系猪ハ隠系すへしたやく先を発せん

とて伊豫上洛より変しけり江戸幕代ハ松平因幡守
康元石川日向守家成町奴ハ板倉内膳正重矯義代官ハ
伊奈忠義此時之守新変に居きりしを江戸へ
江戸より拙者長五年九月新旨江戸発駕ハ首途
なり出雲なりハ村串右衛門酒井作左衛門並弘せり
出使者ハ安藤長左衛門ハ長谷川刀成瀬小右衛門ハ
小栗又市牧野助左衛門山本新左衛門横田長左衛門
大塚十右衛門大久保助左衛門服部徳次郎ハ
小笠原次郎左衛門ハ諏訪山之口左衛門加藤長左衛門
西尾茂左衛門保坂金左衛門ハ高田隼人正ハ
小栗右衛門ハ浅野内匠の近所ハ列ハ横田迄ハ乗り給ふ時

清洲ハ花時ハ石田の方ハ拙見ハ
第刃ハ三ツ山を攻ハ右の意趣を中
ゆへ何て彼ハ首を武ハ
芝弟的の赤鼻首せらるハ清水寺へ入給て法問を
聞給ふハ則ハ法師の俗有しに和尚国師ハ
加へて天上天下唯我独尊の句を法問ハ
賀してなり主清国師ハ右ハ
文をかし芝三列一向乱のとき大樹寺九世法蓮上人
一説三登蓮上人ハ
ハ
ハ

の出書状を二日後に三日小田原日三河守日清見寺
六日清田世右へ清洲の清須より使者来れ七日中泉八日
白須賀九日浜松十日懸川十日清洲へ着され波多の
功を感し給ひ清須も眉を開らきこれに一安日人
馬の息を休らる又去れ六日より依田信蕃正信父子
真田表より江戸出城へかつり来る由を聞て秀忠公真田を
攻られしより上方の事 関東より出馬表みな
をさへを急く上方へ義向申べしと変しるる軍
勢の治金木 佛 度して行路の始終かゝるべし
江戸出城より関東金 義城中 相こと 依田信蕃を攻られ
しうを出馬守仕きと 秀忠公の伝聞て江戸の

城より上れり 出羽丸八宮丸第分松平国情奥平九八郎
守信西丸八石川日向守清定板倉八所司代
和泉守毎依田信蕃 常陸介忠政 内藤清成 本
筑後守大久保十兵衛 八丸西丸へ加て勅書を拝時
内藤忠興 八極老にて 有 なるを隠居し武州忠
いふ而より居たりしを毎正信使を送り出羽守の
使者に従事を活らんと迎へ 内藤列参
正信相信の上より度の軍いらんと同ふ内藤暫く
来して味方必定御利参らん 東八先石田要害より
とゝ垂井 地上関ヶ原迄 十二三万の大勢を力より
して聖合の軍と沙へ 出りたやく軍を初ら迄 参り

云とも云うて猶把ゆり 東西方の将の中より津さかりの
軍をこのゝ程強せぬ大将三人ゆり 第一 家康 江 第二
福島正則 第三 井伊直政 是皆大急の軍をこのむ猛将
あれい息軍を初んこの故より某いこうゝ一定猶ありと
ありとやせしゝ内府うゝ云い老功の者ゝ而不遠てゝり

江州大津城責付大津城事

大津城ゝ小佐ゝ木京極高次ゝ京極長門守高吉ゝ嫡子
従三位宰相京極高次なり 家康江志を通し 東国
義向の義も名代として 部長吉多賀越中守 此附は山田
弾正大弼 大勢をゝくりし ゝ高次の妻女は浅井
出羽ゝ娘なり 淀殿 秀頼公の母 あと姉也又 秀忠江の御台中も

ゝ妹なり 是い先年 大閤の命にゝく伏見の河中橋ふて
婚礼ゆりゝ高次ゝ妻女ゝて 是ゝ 高次 秀忠江とは
ゝゝ聟也ゝれい 関東へ 新しかりゝ 大津ゝ地利悪く
ゝゝ三方なれい 水き 竜城と叶ひゝゝ 佐和山城
敵ゝ利を付んよりい 深を加毎へゝ一旦石田方与力して
かれゝ濃州へ向ゝ 時 時 義を見合せ城ゝ出とり 忠
戦せんと思ひしかい石田ゝ与力しゝり 石田濃州へ
義向の時 高次 義を 大津を立ゝ出るゝ 九月
廿日 江州 東郡 まげ 海道 京方 西ゝ 大津へ
かゝりて 町屋を焼 捨ひ 栗津のこゝゝ 逢坂 木川

是仮陣より柵をふり往来をふさぎ兵色を立れる
石田方立花宗茂勢多は居うしろ京極うぢ[illegible]と
中て砲聲こゝより早る間もなく大坂へ注をし又石田う
陣へ告く三成大よ初とうき嶋よ敵出来ては軍
難義成へしもやく大津を攻落せとく毛利輝元の
兵筆吉川廣家久留目秀包伊東民部祐隆小早川大隅守
三尹筑紫上野介南条中務太下侍中守黒田長政増田
作右衛門石川掃部介毎賀出雲守増田右衛門尉人言田
中兵部少輔外大坂弓鉄炮の人数十人向ふ立花ハ勢
毎より出て向うへと兵を催し同七日朝より大津を攻
長良山ゟ大鉄炮をたゝちうけ海陸より攻寄
油井勘兵衛門を守て防く山田大炊介も東西ゟ加へ
居うしに成大炊介と赤尾伊豆守と人数を引て
外かまへ出張し防しうを守る敵方を元切しに
東西右衛門を思て懸へ敵方兵衛ハ汗ゟ成
濱ゟの門へを不拘へたすしに増田う良ホ林金吾と
ふをの戦場ゟ行あひ旨なれハ我陣へ使ひ来る
尾き合を助るとう云共世ゟを合ゟうこなう
しといつり者ゟいろく後してとかく城をやく
攻落せとく俄ゟ山せいろを上け或を大小の
鉄炮を打うを或を三井寺の上の茶うを山ゟ石火矢
を打うけ塀矢うを打屋を立花宗茂せくゟ

寄手より城攻のてい者ちくく自陣よりかい者り是程の
兵共ハ具足の上縄手綱をかけ其縄目毎ニ玉薬
筒をさゝゝ玉薬をつきうゝくもちつゝ矢海をし
矢よりも早く自陣の営一放の内ニ三放ツ打
しうハ敵ニ味方ニ目を驚うゝ鼎ホ立花三左衛
抽ノ五郎出ハ申しする事ハ玉をひし又仕寄竹束の
御法ハ変なりけり宗義ハ攻口より城ニ向ひたる
一ツ事ニ城を取る事ハ深き六人余播州の士を以て城の
方へ出張を堅くせ城ハ内ニ城ハ内ニ城の
内を稽行事を以く仕寄ハ城の底をとる為ニ城方
の矢玉人夫ニあたる事なく行事を付寄て城と
寄手の者ハつかみ城一ツ丹波れり是ハ城中迷惑
ハ内ニ城ハ内ニ城ハ内ニ城

言次の妹ハ松の丸殿とて大閤の妾なり大閤薨逝の後ハ
大津の城に居られしが合戦の最中に松の丸殿の侍女数
十人そそくさ天守の二重目ふあけ玉しが大筒炮来
りて女ロ五人うちころさる松の丸殿おとろき家来へ密
通して和平の事をゆ申さる故家来悦んで言次へ
いそぎ和平をはくらふに言次さらに同心せざ是ハ
東国勢を待うけんとの事なり然るに言次の臣思田
伊豫守といふ者を一番の大将なりしが俄に心替して
城中の矢さきをとち諸炮をとる不打なさ也思田う
ち死おそれていふ人もあし然処に家康の物ハ東国
勢をや引もなくよるとさて言次と和睦して東国

勢と結ぶ敵ンとて言次本食上人與山を以て和睦を
いそぐ家康ロハ同十四日東坂へ着て思ひ思ひをして
江州の敵地を放火せらる大津城ハ郭外の通ひなき故
東坂表陣をハ不知沢弟ハ粮ハ乏くなる然心のもの
出来ず折ふ陣屋へ火を付る打続き江州の放火を見て
実東の不利とハ不知して西国勢充満ロ方を固くと
心掛られい本食上人の意見より付て和睦しけり言次軍事ハ
ほとなき所心
故江州の敵地を放火せらるる事
なるとお家の指燃なりるを西国の所ハ
不利なるハ何そこの地をやうん言次
や然も実東方の所なるとも知るべき
院ハ和平調ひて言次ハ大津城を開き三井寺の雲光院へ
入寺し世ハ言次へ続りるる日を延引して石田滅亡し

天下静まりしかハ高野をはらひとうや今一日城ぜ
ぬうちハ安房の忠勇なるへきよし云念願し事共ニされた
城中ハ黒田伊豫守心を変し城を二つハ分れつゝハ竜
城ハひらく和平しなると学〻天下平均の沒ハ伴の
黒田伊豫ハ逐電し覚照寺と号し西國辺ハ蟄居せ
しを笑ぬものをなりけり

大友一揆付本付寄相寺山軍并黒田如水後法事

豊後國本付ハ細川忠興城をたり東國殺向ハつき本付城
留を心えなしとて家臣松井佐渡守有吉四郎左衛門等を
遣して守らせけり実に去歳四月大友義統ハ朝鮮の軍より
臆病して秀吉公不仕を沒収せらるゝ迫として居しう
しう氏附一揆を企てしに旧恩を忘ぬものとも大勢
集り石垣原を立石ハ要害を加へ近所の城をとらん
とせ

柳大友家ハ新朝の后大友左近将監鎮理 童名市法師丸 豊後の旧
柳の城ハ居しまを云位鎮理の長子云位親秀子云位
新泰子四位負親実ハ親秀の二男なりを新泰長
子して家をゆつる子云位負宗是也親秀の三男之
子云位氏泰子五位氏時子氏継云官ハ
早世子云位親世実ハ氏時の子之子云位柳
子云位親隆子云位親著実ハ氏継の子之子云位
親信子云位親盤子云位親治子云位義也子

従三位宰相義澄卿子孫八道五位宗麟卿子今の
四位侍従義統卿なり去ハ市法師丸十九代豊後の守
護足利尊氏ハ九州の探題ニ成給ひ
細川ゝ家人共本付へ入り給ふ大友ゝ家人葉田小弐殿と
ふとの本付ゝ家へ来り豊後の國人を加へ一揆を企
りなを松井有吉木付ゝ家ハ九月三日兵を率して逆者
共ハ菊四郎俄事なりしとも元合せ戦ふて討死ス本付城ハ
孫ゝ家守護ゝ大友ゝ宗麟ゝ一族家人なり
勢三千餘人九月九日本付城へ初て寄囲せむ城中
よく防ぐとゝ雖ども粮乏て長篭城かなひ難く見えしよ
中津城ハ黒田如水ゝ侍ゝ細川方を拵へ
一只一騎もせ出ス郎ハ共ハ
如水ゝ加ゝ沿一揆のおこる時ハ加ゝ
する之和そくて本付落城していまだ
むちを上げてすむ色を見ゝ扇ハ共曽の紐を結ひ
百三十騎中津を出ゝ如水ゝ追ハ
来ル近境ゝ加ゝ傍あれハ出ゝ
内義鄙ゝ侍ゝ安芸の城辺を通る時ハ
芸家をうんかゝ安芸の城ゝ
こゝとゝ尚城ハ為ゝ
黒田ゝ兵士十餘人ゝ
いふとのをんて親ひ城辺へ追付
一只一騎もせ出ス郎ハ共ハ
如水ゝ加ゝ沿一揆のおこる時ハ加ゝ
する之和そくて本付落城していまだ
むちを上げてすむ色を見ゝ扇ハ共曽の紐を結ひ
百三十騎中津を出ゝ如水ゝ追ハ
来ル近境ゝ加ゝ傍あれハ出ゝ
内義鄙ゝ侍ゝ安芸の城辺を通る時ハ
芸家をうんかゝ安芸の城ゝ
こゝとゝ尚城ハ為ゝ
黒田ゝ兵士十餘人ゝ
いふとのをんて親ひ城辺へ追付

語とゝへしかハ大友ハ石垣原あこもり軍せんとて本付の
囲をとゝて石垣原へ引入しかハ黒田如水ハ[illegible]
人数大勢ゆゑ敗しゆへ言田の城へ[illegible]たり行中原助う
毎日居の兵隊を[illegible]て先[illegible]へ加る回杵城へ[illegible]
りれハ大田起源寺う毎日居の兵[illegible]如水ハ豊後府内の
[illegible]ものハ水ゆ従ひ先[illegible]へかう院ゆ二千七百人ゆて石垣原へ
向ふ御門う家人松井佐渡守有吉四郎兵衛ハ黒田方先立て
立居へ[illegible]大友方合戦しるう一揆ハ有吉
討死そ[illegible]こ以時大友家従う家人垣見城ゆ吉弘
加兵衛といふものハこうゝの一揆討ゆとゝ[illegible]
強くし松井有吉う二倍を破らんとや思ひ[illegible]

おてかゝ[illegible]ハ[illegible]うけうてゐこもむ吉弘先かけして
戦ひりう松井有吉ゆ初の軍ゆハうれ[illegible]
れて二十餘町敗ゆ[illegible]さゝ[illegible]ハ本付勢ハ馬武者吉弘
方ハ歩行立ゆれハ追討ゆ[illegible]吉弘か[illegible]
行ひ乱色ゆふくう居うりう以時松井有吉方ゆ
加藤清正う熊本城へ加勢を色ふ清正やうて三宅角左衛と
いふ鉄砲拘ゆ足軽百人そへくこの向と[illegible]知ゆ三宅中根ハ
そ色うしハ当時清正立のものゆ[illegible]
有へれハ旗本ゆ[illegible]
一人働すへき者と清正目利して一手の[illegible]
かゝる大義ハ士の[illegible]

知らず武田方うとき人なりとの事なれば兼てより所を
元とし所領を追放され面目なく思ひ居たりける
三河家人坂川忠兼日下部与助毒人と鉄炮百挺をもて
寧和寺山の城に籠り大友方ハ寧和寺の城を囲ミ攻
寄せられ城内ハ久保寄情討死せし武田家人
井上九郎右衛門ハ吉弘嘉兵衛とつき合ひ吉弘を殺さんく
殺をすてゝ吉弘方ハ井上をかいつゝんで
勝の下知数たび井上を組とひとしく二力さしられハ
流石の吉弘も深手なれハ忙殺としてたゝかへさせて
首をとられしう宗像かのもんも吉弘を死を見て一見も
不可討死しけり大友軍勢ハ二人をみうしなしハ

軍兵四角八方へ引ちらし作く武田方ハ寧和寺
山へ籠城し城中ふこゝる松井有吉力を拾てはき
お前後を攻しかハ大友陣屋を見くるゝ事なり
立く軍兵を二つ引とけて殺ふ事を作り後ろを
さまとも大友方ハ歩行立られハ皆うゝられして義統
陣より敗北し石垣原へ引る豊国の砦なれハ水も術を
失くなるさんと思ひて寄せ来りける
大友義統ハ豊田如水と虜付安義寄来る城軍ハ
如水ハ僧を使として義統をいろくさとして和睦し
義統とりことして中津へ新ら軍を加へ出て別
安義城を和睦事二十日陣了収治を過る安義城中分

然るに軍士ども柴水を討んと云ふ水伝をもふけて
二里計敵を偽引出し為くに追懸かゝる云ふ
落々冨某の城をせめんとおもひ城の西を抜
よく防て敵を為くうち迄りぬ水ハ家康の軍
利なくハ肥後の加藤清正と共合して九州二路を攻登て
上方へせめよとて石田と勝負せんと思ひ定めく居たり
ことに清正の部人坂川日下部ハ実ハ寺加藤に向ひ
しゞ大友敗北して中途より無事へかゝれり
さて石田敗軍ハ去れ江討死せし吉弘加兵衛元
寄出て人民を脅しられハ民恐怖く為府の濱より
石塔を立て吊しらハ元災心しとや今よりを石
塔あり是といふ末世の奇特といふへし
後日のためにのるまし
如水ハ小城より発まそうて後日の攻元いやと思ひいろ〳〵もてる云ル九月十二日ヶ同十九日迄
日夜より攻れども〳〵守りて落さるいか水深をめぐら
し城元の中おく一方の物者る表孫兵衛の弟孫六郎
といふものゝ謀叛をすめ同心させしかハ城中二つよ
り加也寄よを引入しかハ城を如へ〳〵冨某城を取
濱先如水ハ清元て軍兵を入玉しかハ城元和泉守元
城元助蔵子長九兵衛ハ元双の元為りしら打ふし
英濱ヶ入り無事をやとひ〳〵く日本の衆同志為れハ
在中より冨某へ志のひ入りて攻れハ如水ハ元ハ〳〵

かゝて城を攻くゝ籠城すれ如水いうまて又国を攻しう
とも助太夫父子共国を城をもまて未ゝ落さるなり

宗庵肩衝茶入之事

石田三成か家来堺上ると宗て五月九日濃州より茶壺
を時堺の町人宗庵法師といふものの日来茶湯を好れか
三成かれを伴連む世話をはなれ出しして石田か陣所へ
とゝ来る三成悦ひ対面し先決て中るか汝宝て学くく
あゝん三国の茶壺他界の付宗庵我前へ出て飯を
食しゝひ早て小性我前へ銚子を持来るよ茶人
ゝ安飯椀茶碗の時酒のもを出る
我驚て銚子を出しを汝か思ふん而
いと和しく給仕のもかゝも茶ひつゝん然た三成此
報謝を金ん参流る三年汗付も胸中を忘るかし
平物茶入一孔の事を思ひ入て飯事を忘るる
故之三国の茶の和漏今ことに言く又先年汝方合
茶会三百度あゝ賞玩しし唐の肩衝の茶入宗庵肩衝名物あり
今見を汝と接る之三成か討死せい世茶入必焦出と
あゝん宗庵見を指朝夕為者茶湯共へ我又軍戦
間かい接價見をそゝん茶入を渡共宗庵請云て
此合戦宝て中利運あゝん先天下平治之節生ると
会釈して営を出ゝ宝後石田亡ひゝく彼ゝつき
宗庵の方ゝ参ゝ仕ゝの沙法ゝ此茶入天下の

名和なまいハ堺へ人を遣し宗屋を召れるゆ彼法師を
石田とひて後逐電して行方なし仍て人形を絵師
して尋らるゝ共ケ口つゝ名尺半の小防を絵ゆよ
筋前和出ゆく不審の儒あり常に茶湯を好き迷
なまをとも玉奇羅よ茶湯すき弱常なるゝ共ハ民
ゆまねくいゝゝ師として茶湯をならふ中道田
長政より若るとの仰り仰くハ年十二月十二日長政彼僧を
まゝくに分来る長政ハいとく汝を憎の宗屋なるを
僧ゝ宗屋長政彼ハ宗屋かゝ法きと号する
茶入汝石掃部や宗屋ハいとく彼茶入ハ石田三成の
号和也去九月九日去ゝと法り秘蔵して今よ用ゆ
と以長政を茶入所領食俸あり長上ゝと以宗屋知て
ゆゝく情中とをゝうゆい中海指上中さんとく懐中ゆ
茶入を乱ゆ所ゆ黒田別伴の茶入を家康ハ
就宗屋ゆ中ゆ法ゆさに中上られいかもゝく法ゆゝ
不罪ゆ長政不便をかゝよと仰ゝ法しハ長政ハて
宗屋を技掃まひゝり西ゆ花き命を助りり
石田軍秀秋逆属記付小西夜打評定事
九月十二日ハ家康ハ波草よ美濃ゆ清息松平
下野ゆ忠吉ハいまゝく清洲よまゝ清ゆ小ハ加藤左馬助ハ
外伊ゆ多ゆを拾家てひそゝよ中ゆ中ゆハ敵ゆ尚国ハ出張
法ハ秋打逆家ゆ心えゆし強ゆに下野ゆ長清別よ

出発あれハ其陣をハらに集く安宅軍と合戦をなく
此所に寄まつやうに給る（し）仕人の至あるく其り給ふ
といたく却て人のそしりもあるん清仙うゝ餐向の根拠る
為しと高ひよいひそれハ為人をもうゝ弟ハ此方を告しらふ
ゝ高き彼辱（をせ事を加明う志を感恨せられそり又玄法
家康四の弁ひまく玄方河の国を旅久加州より到り前田利勝も
冥加出馬より為し小松の城を丹羽長重も玄方う諫よりて
味方に属しそり此時石田は秀秋のんをとうゝ人其風説
を聞て諸将と語し口ケ条北廣流より誓紙をとへて矢田
辛右衛門を使として秀秋の陣へ密に此時（石田ハ濃州より此しるる時なり）
一ッは秀頼公十五歳と関白職美天下政事秀秋（陣中
（き事
二ニは秀秋の五方婚姻として摂津国にて所領事給
為如前之事
三ニは江州にて十万石稲葉佐渡守国十万石平岩石見守
秀頼公にて給ふ
四ニは尚在侍京都にして金子三百枚稲葉ふ国三百枚
平岩ふ給ふ

九月十四日

安国寺
刑部少輔
治部少輔
大義大輔

籠城中御云殿

秀家

以奥より誓紙あり

秀秋使者矢田平蔵より到し事彼中状仰付こし秀秋
秀頼公の仕味方なるに属滝の四ヶ条を先へ了こ
ひを請てみこの陣より別せんよりハ如国より海ゑんと怒
みこら返事して属滝と誓紙を返しこり矢田海して
強ことこうこ加ハ人と安心はせこり帯り 家康ハ
赤坂岡山とふ知より為せ申而る歌方しこり服坂中出

安濃小川左衛門忠村木河内守利綱木俗嘗言虎より伝て味方
に属し忠義なりと云ふ市兵衛しとの返事心しこ
陣所ハ志摩ハさりけり兵部井伊直政を立て石田以下の
諸将の陣へ志のひを入て一こ秋より安しむへし又難儀
をいこせて敵を苦とい兵へしと兵部ハ直政ハて
甲賀兵軍の功名と数十人を出いろ〳〵難儀いこせり
さこよ小西摂津長ハ赤坂の陣へ夜打せんといふをこ細ハ
家康ハ虎狼軍ハ為よて尚世なふものあり婦川
合戦まこく知へし秀頼ハ変のこのかれハ今夜夜打せん
といふ諸将けりハ小西摂津を立て武運尽こり今
度の軍ここ必定打負ゑんとの考これこ甲斐国

先ひとへに新流斬り出でて石田方の陣中をにうくうひ
りるなれよ若打よ出る事ハ相至て若打よあるべき様よて
うまへ居申りけり先 家康ハ濃の諸勢なり

濃州株瀬堤軍付小西軍実見并石田ハ下引退

関ヶ原事

石田ハ三成方をとゝふものハ数度の言名して名を知る
若かゝ今度も三成ハ先手をとりて濃州株瀬川の上に陣
者ども有を深よ是程数百人ハ対馬守と交て中村一学
一忠ハ(後の肥前中の殿)陣へをくをせて去りに備引出て打合
有合ふ武者ども打合を追立る方をハ深ハれハ皆
ふくと引りを中村勢追ハけり事度し時ハ方を

林の中に柵をうま(彼所ハ寄兵を備へ一度にどりと出て
中村勢をれこ(もみ立れハ中村勢大ハ敗走しり
中村ハ家臣野一色形部助原田其外数人をせして我ハ先ぐ
討死をせんハ味方の兵通る道ハ三人ハ妻をとまりく追
ハる歌をはきたゝ三人ともに討死しり萩田道林
井久右衛門言屋助八郎兵衛和泉ハ以下ハ弟をにして
助り者り歌ハ程遠東る時ハ東方より肥前玄蕃頭氏
場を見渡して横合より入りて戦ひ方をハ場を
みれ中村勢ハ返て合せ戦ふ時ハ方をハ株瀬川の
堤ハをいて取てうへ七八度返ハ追まくり戦ひが
有馬中村ハ南勢ハ方をハ遠ハて東を先て引て行

家康ひとりに漂流し井伊なりに引て浜名湖をとり収
と伝ふるしらい面人ともに甲冑をもかぶる家人も不異只
二騎はきて帰りしが忠政うやうやしく甲冑をとりやや忠
勝ゆてふよりとあいさつし面人急おもうれまの
陣面へ引かるるよりなを多忠勝ハ遠より引うつ只一騎
様徳川境へ立てとめらるなを中暫大猶忠勝なるて
徳川殿の伝まて来れり我下知なる信少しと軍士ハ指
揮せれいさうこの軍兵下知をゆゆてをかいち兵をさう
をけるに敵追ふ事あるし皆人気を奇なりとふ
なを多ハ元来智曾せ氏家人も具せさるしいさう勝
家色みく思方へ池て下知なるし知なる下人松平義宗
とふふの代合戦ハ時まくハ家康ハ渠一人指ふ
忠勝ハ敵へ矢炮の来るを甚し馬のうけて立
くれて色退せて いひれも彼もの不用てなを多
ら矢表ハ立姫さうる忠勝ハ勇をうんて世上静謐して
指馬ハ乗る事をゆゆて松平義宗ハ名のをきり
ちうくなりて世改来りうちや軍義しれいうて
出ぬきたるそして彼ハ中ふはとなれり此時毛利
秀元洗列へ来りう南宮山へ大勢のかるを見て此勢
いくさ中に落りうけいた大事なんといふなを忠勝
一人ハ氣をひなり只軍の勝負ハ石田ら敗なと猶ら
一戦なあり面こ猶勝を相ふ事を思ふへ立毛利ハ

合戦をふ将事ハ戦を好まんよハ言さよりたりて陣を
へきよ結句言みへ上ハ足合をく活うん方へ付き
為しといひが果てかをうを策のうく成りうハ人
ら利うんりうとうや石田ハ将たをか株附川ハ利を考ム
し事を学ておとうきて羽柴小西を拵て敵
落城し羽たをハ打まけみうく乱をうしなふ敵味方ハ
無家大よ寡なり一先ん開うる京へ引退てこうの大会と
なりあいて軍せい利なるくし東国勢七万六千三百人
と学く味方ハ十一万八千六百八十騎人一処よ成て戦ん
よなと勝利なうんやといふ小西学て主事為るへ
し軍ハ百万頃ても一万の物ハて天下を定む彼集
大将も士卒も勇みきゆへ羽柴城を羽たをも軍旅に拵き
為し今ハ陣を去んる後世迄の和睦なり一足もをむ
に社稷も虎の心となれ運を天よ任せみうくをこつよ為て
一ハ徳川殿ハ本陣へ籠打しなる二ハ其陣をく
也し主ハ大名をかそひうくハ援兵の術あうんこと
陣屋へ又赤坂の主敵をやきうて軍の物質を焼
へ籠打しても利なく敵さいう兵ハ主足ハて関う
京へ引て陣し地合の勝負を学兵へとをめしうを
運のうくなくなるひ諸将も取引せた三成が中れるハ
みうくの兵よ内逃去るもも多しと学ハ古の策も敵や
逃せん為く速ハ陣を退てこうくの勝となり合く

功を立へしといひしれ小西いうて味方より孤疑のふ
百万の勢も用よ立海一人より勇はなきものなるそ
といひちらして我陣へうつりなれ月十四日の夕方別
石田を始てとくく陣をもひ物田の間海を隔
関ヶ原へ引取り墓所嶋ヶ原に甚てい落人のおそ
小西ヶ兵士ども皆ひれ小西我もさせしして
いうて去るあらんとくよりひて皆て陣こものう
まもりしにくあいてうとうへく寄付兵粮ハ不及云ふ矢
狭炮長刀甲冑太刀刀まく陣こにて負るる足の
ふを不もなし御代未学の孫事し行ハ色ヶ陣所へ
人を遣し人夫ヶ百餘人高てみくの於負る寄付

云具兵粮を山ヶ河うよひろいあ川め関ヶ原へ或は物せ
或は馬ヶ負ヶ大垣より引取し法ヶ
面しの法陣よりて変れい兵具ハ関ヶ原東勢のひろいそうて
皆面の批判口惜く有行長ヶ所ヶ寄りい
法用ヶ捨ひ山ヶ寄あ法へしと嶋色させ件の法色を
関ヶ原八幡ヶ西の目なる小池村よるへ至所に法
ひ陣者れ八面目なくそ見えて小西は家人ヶ白ひ
かる恨為なる石田と不知てあのまれて大死せん
車口惜ヶ法りとて今石田を立てハ法よのそんて
義をうしるふかれ人ヶあさりひとへ行ヶ
愚意なれ人ヶ恨む人ヶ法にあるそ物自汝ヶ軍功を

空くする事迄と云なから我も汝も今度宮仕の
軍なれハきしなひきて知るるといひけれハ家人ハも
一同よ義兵を上よあるべしあれハ事の順ひ切く
いといさきよく見えなりけり

関ヶ原合戦付忠吉石事

ものひとりうつて石田ハ関原へ退て中ハれハ十
万地勢を引率し関ヶ原にて一戦をとて宮を
旗将へ姻戚ハれ寝ハ入ふ旗将ハ日ハ西ふさうし
合戦ハ引あらんと中ハれハ日延引せハ大ハの勢ふ
加ふ敵大勢となんものの方に敵ありてあさうたる
を我れて討くしに辰の刻よ軍を初へしと作
者ハ皆れて明ハ去程よ石田ハ十一万八千六百
八十騎人を隠さよ多分しせッと密井の南南宮山岡ヶ
鼻よハ毛利宰相秀元吉川蒲人長曽我部長束安治
ハ二万二千八百人山ハ姻ハ毛利ハ
いくさ初ハハ横合よ入んとし此勢の中毛利吉川ハ
関ヶ原へ密毛きのふ事中遣ハしハ備の立やう
宮岡ハて怪敷見えしハ池田ハ池田ハ
浅野幸長ハ山内ハ
余人岡鼻の敵を押へ又松尾山ハ金吾秀秋服部治
村本河内ハ小川土佐ハ赤松左兵衛大夫
吉隆ハ秀秋の心変を推量し平塚因幡ハ戸田武蔵ハ

津田出雲守を始め、合せ兵を二つに引き、東国衆関の藤川より西と東に川を隔てて松尾山の秀秋の陣を押り、東国方七万六千三百三十余人九月十六日の未明に毎日井を掘り、関原の野に陣を敵陣を見定れば、南宮山松尾山小早川伊吹山脇坂小川小関毛利村藤川村岡の藤川和泉守道ハ不渡藤下山中吉川道元海中藤明ぬなは胡雲々々々して小西勢敵味方見さけ々々已の刻霧晴り開東方の和見法井右馬頭又江法義表勢中奥平藤兵衛本多忠勝西方の斥候乾坤定清法田小三郎二人ともに敵味方の勢ハ敵と法義馬をひかへて見ハ私の功を立んと〻〻公用を志ス〻〻今日の勝負出来ハ如き様き勝負なり〻〻いそき勝りて其事を大将へ〻〻する役しといひあれい乾も澤田も出て引退く富塚伊黄弘田義家小西行長ハ東国勢の旗ハ見て関の藤川を打開り小関を南辰巳まむりひそかへをし川秀忠も大軍〻〻国所より陣を又大谷平塚戸田重政田重宗津田信成もお陣ハ石原陣を引下し岩川を渡りて関原小の地より押出り西ハ山を後ハあてて不渡を立ます也も辰巳より回ハ陣を東国方の先陣福島正則ハ並てより う第なる出張なの馬回りハ雲霧に備を立清兵を出ハ十六陣の備し右ハ山田塚尾有馬左近志摩右ハ

京極丹後守高知父子生涯清須守先手一番ハ福島正則
二番ハ細川忠興三番ハ加藤左馬助四番ハ黒田甲斐守
五番ハ田中吉政六番ハ筒井伊賀守七番井伊兵部少輔
加藤中務大輔九番松平下野守十番藤堂佐渡守十一番
蜂須賀長門守十二番織田有楽子息信雄十三番
浅野左京亮十四番池田三左衛門十五番寄合組を次に旗
本をもって出る其後西国勢中より福島正則ハ
東国の先手なれハ子息刑部少輔正之同伯耆守正信清須城
八百丁ニ五百張ハ先ヘ組合せ川を合のうへを石田ハ
先手へ射かけ八百丁の清須城を攻る時をあくるハ東ハ七万五千三百三十余人時を
とり西国方十一万八千六百八十人同く時を合せ双方
十九万三千九百余人の声なれハ東西南北数十里ゆるき
渡り天地も裂る山も崩る如く鬨に
諸手一同にいくさ初りこれ軍を初め福島父子三人
左翼より西へ向て清須城を攻る
出る石田ハ陳へ向る西国方ハ石田宇喜多備前宗茂小西
摂津守長柄を以て
黒田ハ世合て戦ふ東福島細川加藤黒田ハ猛勇の
大将なれハ大兵なれ恐れず雲霞の如く退度なく
五百騎を練して合限ハ戦ひ又左のかたハ東国方
藤堂京極蜂須賀列をそなへ西国方より大谷吉継

戸田は田中兵部を引て松尾山の麓秋中の心智りと見て
此勢を押へさせ四人に一手にて敵を京極備前守と
戦ふ東国方石田の伊賀守負改りふの一番首を取て威勢を
始る織田有楽も三河の遠を捨て戦ふ石田の軍勢
横山新内右京亮と志津戦しが横山終に討死り藤田
戸田平塚三つ巴苦戦して前を崩す織田河内守戸田
武蔵守と各のりけく錢を合を戸田を討る戸田の
家人嘉右衛門を高織田と川てうと見るを織田の帝木
りの迫めて終に嘉兵を打れり此時東の軍使ハ云文
字の長物さし或は黄母衣うけく陳くへ作を傳ふ福島
刑部田伯耆守若戦して首を取て家康の陣頭に

入るよりよ松平忠吉と井伊兵部は七番九番の備へ
なれハ敵よあふる迄うんと思ひく自分の云をいか陳
よ始し南蛮をいうこ十余騎福島の陣の服より出んと
正則の御木可見戦ハ篠の長物を横之
先遠よせ始さりて福島今度の先陣を誰合なれハ
先登をとんとするや通せ南とのく志る也改屋代し
見は井伊豊改し信よりて大年候よ出るとふよりり
戦闘て海を改よ福島軍を和しなれハ忠吉豊改
国の京より不被小関の男よ加藤左馬助と筒井伊賀守ら
陳の男より福島弘の先陣へ討てうる筒井加藤と
合くうけ入戦ふ先を一手ハ追ひ帝の先福島

大勢なれい二陣三陣より合を南ゆりけしもくむかゝ
曽井忠吉亜政義こに戦しうい鳴海もまにあまりて覚え
し鳴海う兵の中ま九州の住人松浦三郎左衛尉継と云ふ
剛のとの男人計すの力まく切く回ゆよその体ま南る
もの術て義されぬいなうり帯り干時ト野当忠吉馬ケ
よをてこ人計の大力をぬいく松浦と戦ひまよを
負しゞ引組く上をトへと遥に松浦い大力の学えある
若し忠吉は十九歳初陣なれも見も力負倫ま戦うり
しうい二三度りこ合しう平ま助るももの家臣
の軍使小栗又市信ま力て戦ひう相ふるやなうり人
又思ものやけん義合ま平とうくまる中ま忠吉上ま懸り
しが人家人高須九左衛門あ来りて馬うりう松浦う
首をれうう忠吉を取こめうんとするを家人の知羽
角内高須九左衛門力て力戦りれも危うりに
井伊小栗ま け来りて若戦も妻ま の腕ま傷う
忠吉い組打の時馬ま なれて分り立うり井伊う郎負
家急海ものこの為ま先んま へ進さうる御ま忠吉
の馬ま なれ鳴ふを見くく馬うり乗りのせ先んと
なる処へ見も井伊う郎ホ武義ちまを せ来り同しく
馬ま うりて家急にいひるハ松浦は 見不具ま
敗なり行ま たやそうこに某う馬まのを中さんとく乞う馬ま
のを中さんとく乞う馬まうきのせ中て分りまて 付ま

後藤も又馬より下りて戦ふ後藤人〻忠功を感しまひく
忠吉より後迄より兼光の勝相武蔵より同服部をはじめ
以後藤は言名代とのゝ見のちんもなるも戦場よりて手負
しかく菊宮山に陣せり毛利吉川ハ合戦初より東
岡へ密進吉川ハ家臣栗屋十郎兵衛を人質に出り
同所より陣せり長束我部長束安国寺おハ秀元の軍勢を
待くいくはくより関ヶ原ハ合戦を見物り
石田三成敗小西家康旗本軍事
おくより池田浅野山内堀尾おハ毛利吉川長束我部
長束安国寺おハ菊宮山ハ岡鼻より陣しるを押寄
ちくるをもて勝ハ合戦せんとも見えもみくの後ハは
出るより成て戦ふよい川をかくして后へきそいさや中
節をはきくして後藤宮内大軍と戦んけれ
一向捨てハ山上の敵討くに出事もあるんとて勝をよハ
強し関ヶ原合戦なうばの出撃合ようけ入く中節を
つき最後後藤宮内長吉より打て掛る中まも知為忠勝い
秀忠ハ三河より三河三郎とふれすの名馬より打て一
陣より乗む後藤ハ兵見くあり同もれ敵や我くまんと馬強の
力士ともあるをひ乗む忠勝心はく一むちあていうあたを
乗て返くハ者ちく我のたるまてけ後藤後藤ハ兵只
射とれやくとて声くより後藤ハ王一ッ寄りて馬より中る
とひくく馬倒る忠勝馬より下立しより郎ハ梶金平

己の馬を忠勝より授れハ其多ハ是に乗て戦ふ平時忠勝の次男
出雲守忠勝ハ時ハ内記と云て十九歳より成長の天下に名を
揚し大力し又とたにの付入多ゆゑ武者二人の手負へ
明切て仰(ノッ)る太刀を鞍の前輪より抜て相図しく
かゝ敵を待受て敵是より碎易して是を付ゆゑ
忠勝の太刀曲りてさやゝ細くなりて其郎木山田主水
永田角蔵加藤忠左衛主にとらせ力戦せ吉原新四郎
長坂新四郎三四郎以下其多の敵人勇を励せ首
九十余級討取り海道より小の山は福島黒田細川田中
平野より加りて石田小西宇喜多此外諸勢もみな合て戦ふ
中筋ハ全家父子ゆゑ西国方宇喜多の軍将ハ石田治部
助ゆゑ合せ一人当千ゆゑ敵ハ是にきせり己の下知ハ福島は
我先と石田方の敵を見くみかくて後より軍ハ
勝しるとゆゑ時の勝敗を打て白旗を立て下知
すれハ家人福島丹波守尾関石見守長尾隼人佐大谷
吉蔵九松田下総守花田清左衛門可児才蔵吉村又蔵梶田
出雲守福島治部林兵部助武蔵源理仙石伯馬以下の侍大将
ゆゑ石田の陣へ入組兵を攻りに南陣ハ中に合を抜
し義を重んして戦ふ東上方勢の馬ハ駒馬にて
冥土勢の強馬ゆゑ立られて石田の勢戦ひつれてゆゑ
こゝ立くゆゑとたてゝ川を渡る福島ハいさんてせめる
に小西ハ長ハかもたゝよいゆゑ石田の勢ハ入りて十文字に

かゝる時に至り脱兎の網裏を免るゝが如く石田力を協て
小返して和戦し一軍は死をあらそふ家康公は福島打
揚しうち捨人数時を作り石田小西をもひやうせとて
時のこゑをあげうち石田小西の勢色めき立て見えられい
家康公はうさうさに立のうち朱筋を取て名誉なの先陣
一同に馬を入れ追懸の少もゆるまず一備ハうはつて石田小西の
横合を討〳〵と下知しまくはゝ清兵衛なの先備へ進の種先
をそろへ戸引よ成て突てうち小西石田の勢ハ崩ふ
とゝんえ〳〵四方へ別れさけて小ゆけ走清兵衛なの勢追る敵を
追うち出馬四つ遂てうしうハ家康公上ヶ見を二三返吹
しめ軍を班せとまねき給ふ如く追ひて返て喝れとく
あつまる此時旗旗を立て八陣を張まふ軍合の中ニ
う成る神のごとくなれハ敵もこゝろ目耳を驚しけり
小西石田の勢ハ伊吹山麓の若伊勢強へ藤堂もあり是
落て死せるもあり此時清兵衛なの士共中ハ伊丹兵庫
河村助右衛門奥平右衛門ハ討死ス小牧助六尼子兵十郎
稲葉市右衛門金松又四郎 垣内長太郎子息想兵衛次男加兵衛
三男作左右四男太郎左衛門小西摂津守ハ若狭国へ落
る名さり石田治部少輔ハ生子新左又ハ三郎
戦ふ是さへきる事なり此ハ国ハ京ハ大の道筋南
の方より西京極西向ハ京極の勢の中へ
うけ入り其先鋒ハ言虎之助也馬之

出羽へ敵に成て討死仕るべしといふよし義経玄蕃
すきるなく戦ひ引ノ時新右衛門と名乗て敵
玄蕃と組て落て押えの新右衛門玄蕃の首をうばへ玄蕃
小性弓木平三郎を呼せ来り為の新右衛門の首を
うるを和為の郎ホうこれ来りたをい新右衛門討死さる
そしてを付敵を追ちらひ〳〵雑兵ちり
金吾秀秋裏切付大谷平塚家紋義敵討死
ちるよ小早川秀秋ハ弥うら切仕るべき由中送る因而ハ陣
せ〳〵服部右衛門小川祐忠も同く一味仕事し秀秋もの下
別近親も初うらしに伺籠なの概も石田へ打てうり
しハ此ハを不遠毎うしうハ秀秋以下ようさ ひまとみく
此籠本へ使さうあんと色めきしう伺下知ようて法華雲
のうち集る加賀大谷の備へつきうる大谷兼て秀秋
心智と知く兵を引て押えの動ちいかもさいうもて川
わうう三百挺ち射ち二百人みく射出打うれハ死せハ
不知矢庭に二百余人打倒さ大谷見ち平塚ち引別きて
秀秋ハ打てうり見ハ打ちうる敵ハ四方へ
敗ちる如ち田中勘右衛門布田新平ホ姫ちと南うく走人
尚ち の勇を奮ひて打死しれうちうち東国方松平忠吉
井伊直政本多中務友堂高虎京極丹後ホ四方ち大谷ち
ち へうりてうる刑部ハ腹ハ兼ち討死の為しれハ大敵

もふ怨敵なりとて目まいろうせ三軍にあらつまく
勇を奮ふ丞塚も赤山内対馬ちかとたてい大長刀を
以て敵二人斬落し彼首を大谷う陣へ遣し此首冥途の
土産よ好よ仕いを上日沈の契約なりと只今死仕に
参宿もいそき出自害あるべしと人々に申ふるまて
いそうき中よ

名のあるを所の合ハ惜うし緒よと南くぬ事せとかるべハ
大谷は使ちよ向ひ武勇しいひ深ちといひ感よ堪しう
来も只今自害し六道のちまうまてまいり多人出家
の迷う自筆ちくてやはしやとも出家ハ
加佐筆ちくやはして燭の傍祐玄よ書せく

類ひうは六のちまうにまて行迷さ紀河事ハあるも
こ信大谷は家人三留れちまを召て我ちよ病あり（癩病より）
首を敵よそうれて生面見苦しあれハ吾見をつかにく
さの紙を見を自害するなり我首をうにへしとく
自害しうこ南かの首を物の祐玄よ渡を祐玄ハう
兼く用意やあ多武具をぬいく急よ法衣を着し首
をもちよつこ袋よ入く戦場をのうれ出く強盗の奥よ
捨居して伯父の跡を吊ひう大谷自害の様士卒ハ
一人も乱世を程歎こに残ひ一人もふ祐討死しう世人
挙て感し者り丞塚同情ハ山内よ向てを問つ一つ
残ひう渠う大長刀に南りるも祐祈て為られぬハなり

者り長刀さらのごとくあり打てはなるを切て通るを
山内の臣 堀井為之丞十文字の槍の穂を切て卒塔をつくに
平塚の長刀もできかねるを打るそのひまにはきをめて国儀
の首をとり出徒ごとくに敗北し 玉川を打渡り伊吹
山へ引上る 東国勢は猶をそれて遠く陣を中に
鴻津義弘義盛は強兵をつかに三千余騎をもつて
おの〳〵大敵あるをも忘れ猛勇をみうしなきも不甚出
勢数万人の中をうけ破て南へ向て落て行秀秋を
大谷吉継為立られ面目なくやとひろん鴻津兄弟を討
やとて服部杉木小川赤座なと二万余人松尾山より
下りて出る平野原を稲葉図書松野主馬一めんに
猛く継の羽織着て二万人ばかりつゝ出て進を遮り陣を張
出をうてい義盛義弘兄弟を討んと思ひ
引取て走るを追て引ゆるひ落ていを見せ
秀秋の兵とも声〳〵にはやし立て遮り陣を張
鴻津兄弟の大刀はきりさき面に猛く猛と切て
敗北浪の異なるごとくたゝ〳〵に退し敵ひろう
二万人ばかり立見もあり山へ逃る松平忠吉井伊
兵部少輔合戦吾勝と入替り打てゝる義盛は秀秋
を追掛ともふ所三千計まんばに成て落行跡に為勢
の追ふを見て是に二丁計引退き言き知へうけ
はめ引つめ射るに為勢ちゝろに打うろ干うれ出

二ヶ所疵を蒙るさまに成津山ようをうけて落馬
しを遂さしと迫うく成を義家聞て返し十文字にかけて
回る成津の勢ハ馬よりおれ歩行立よて戦ふ忠衡ハ乱
拙てこれうく武威をふるいしをしらぬ敵も見を大将と見て
組まんといそぐ戦ふ時ともに義家うなも成津ハ
義家ハ大音あげうく大将軍の末葉成津をうの孫
義久の三男中書義家ぞ武運尽て自害せ人をにう
ものと論ずるなと馬上よて腹うき切太刀のきりさ先を
くいくく馬より下へ落てはうぬうれて死ぬうれ帰ハ
二百八十三騎うけ合く戦く一人も不残討ぬうれ義家
く戦ふひまに義弘を虎口をのうれて見うれ十余騎を
伊勢路より明日落ハうう今度ハ首数三万六千二百七拾
俄級関東方へ送しとうや先面々の褒美を賜りとし
石田小西以下ハ武具を脱ぎて ちゝぬ里に宿をもと免
仇偶よりうを落ハ者う

国立公文書館
National Archives of Japan